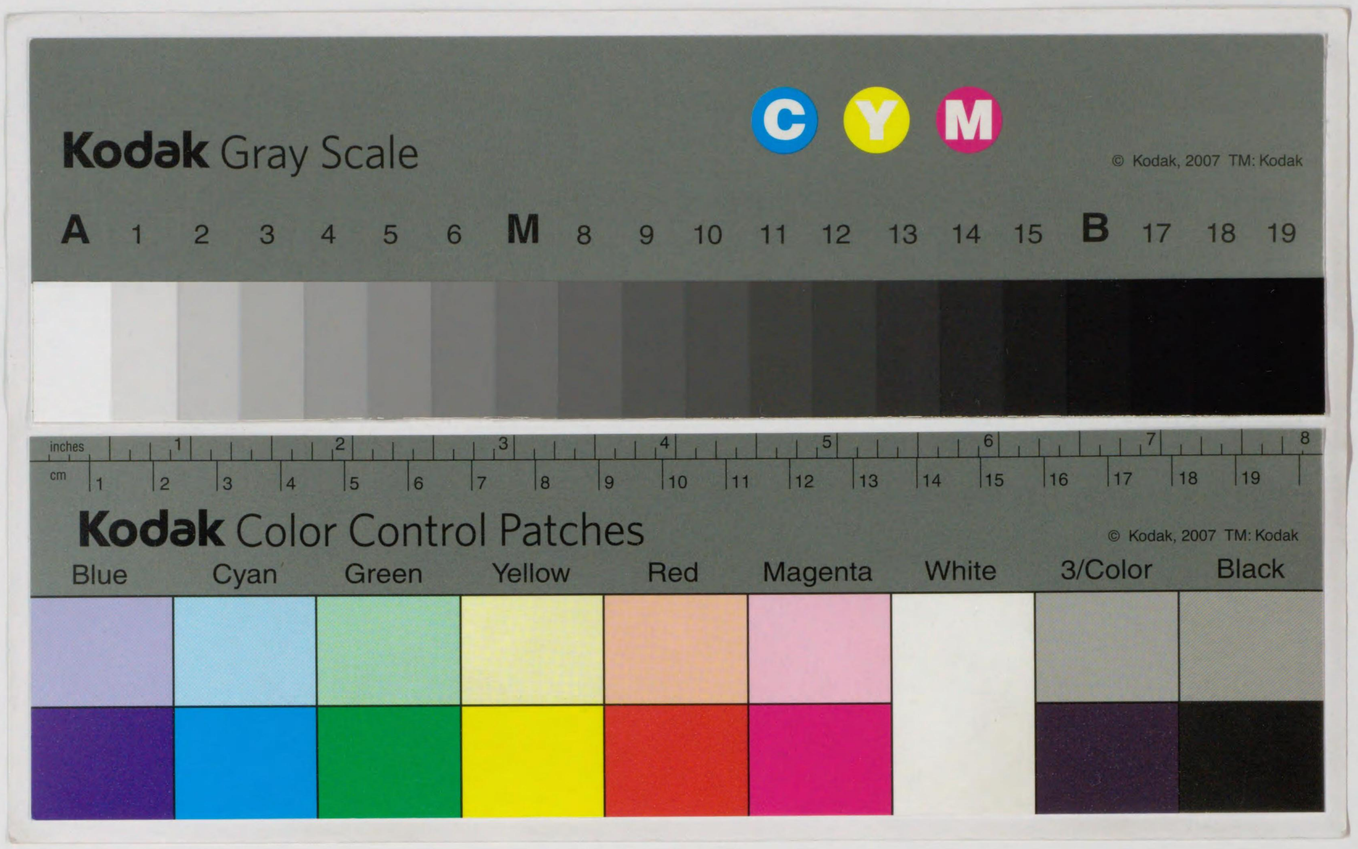

Kodak Gray Scale
C Y M
© Kodak, 2007 TM: Kodak
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

162-86

蕪分船第六目録

菖根崎
雲鴻
大融寺　附神明
小野天神
め支池
鶯塚
釋迦堂
紫禪寺
大乾寺
三寅寺
鵜塚
天満交　附星合池
東照橙現交

大正 13.4.15 内交

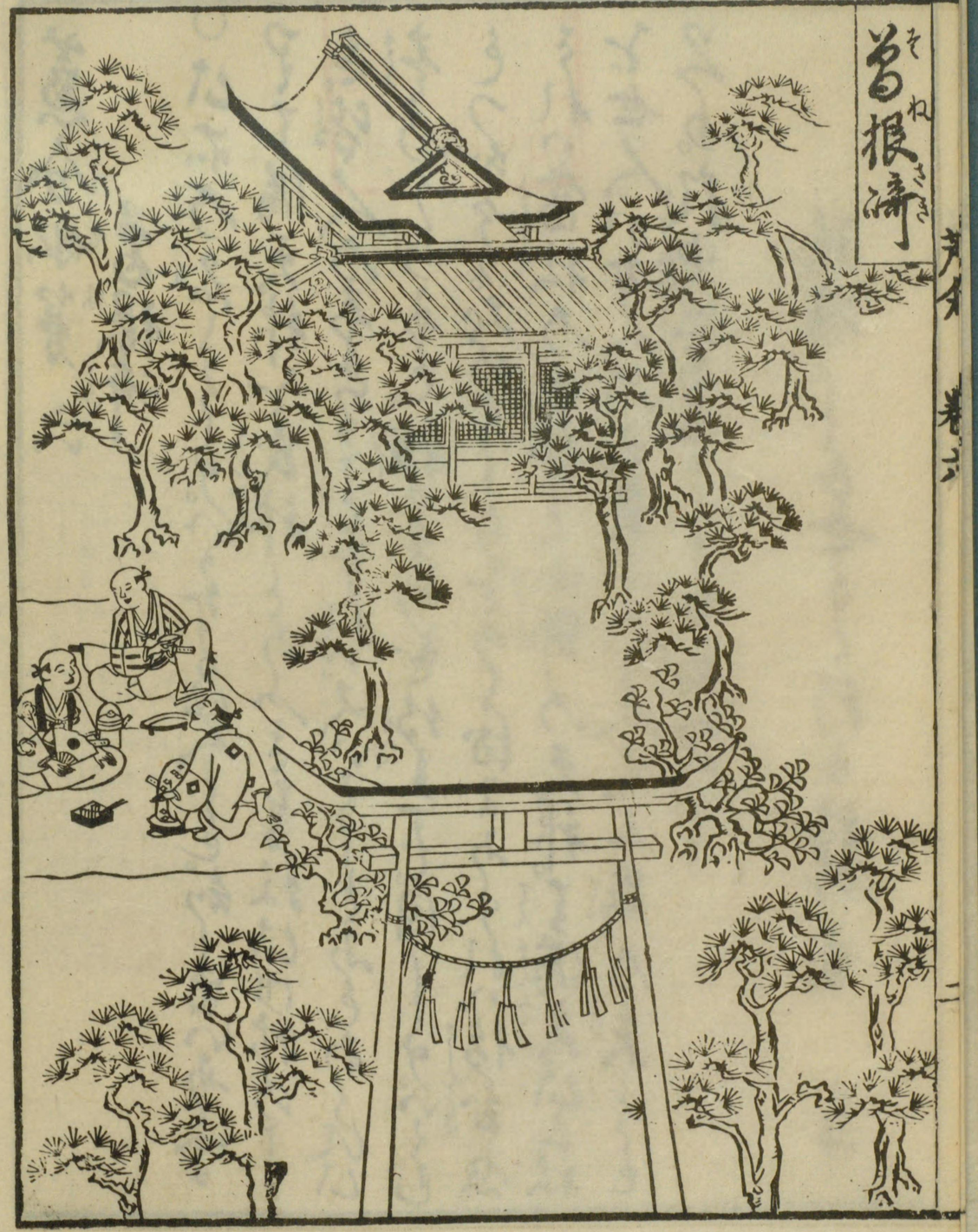
萬分船第六

菅根済

○此所の名ところすべていかなるゆへとも。知りまいらせよ
又天満天神と氏神とあふぎ奉る。此御神のこと
たゞ諸人のまもりとなれば。又いそしとふもあつく此
春のうらゝぬも。相さつきを待まで。同しかりいふも
もつらぬる。其のもしらをとめて回まふなれば。梅松然。
され当社の御神と。小野の天神。天満宮。此三社
と。世人いかなる人の三足ふたつなく。三鼎の宮とも
いふか。其中諸あることしや。鶴かへし

結縁し手向せりし神の書

玉仲

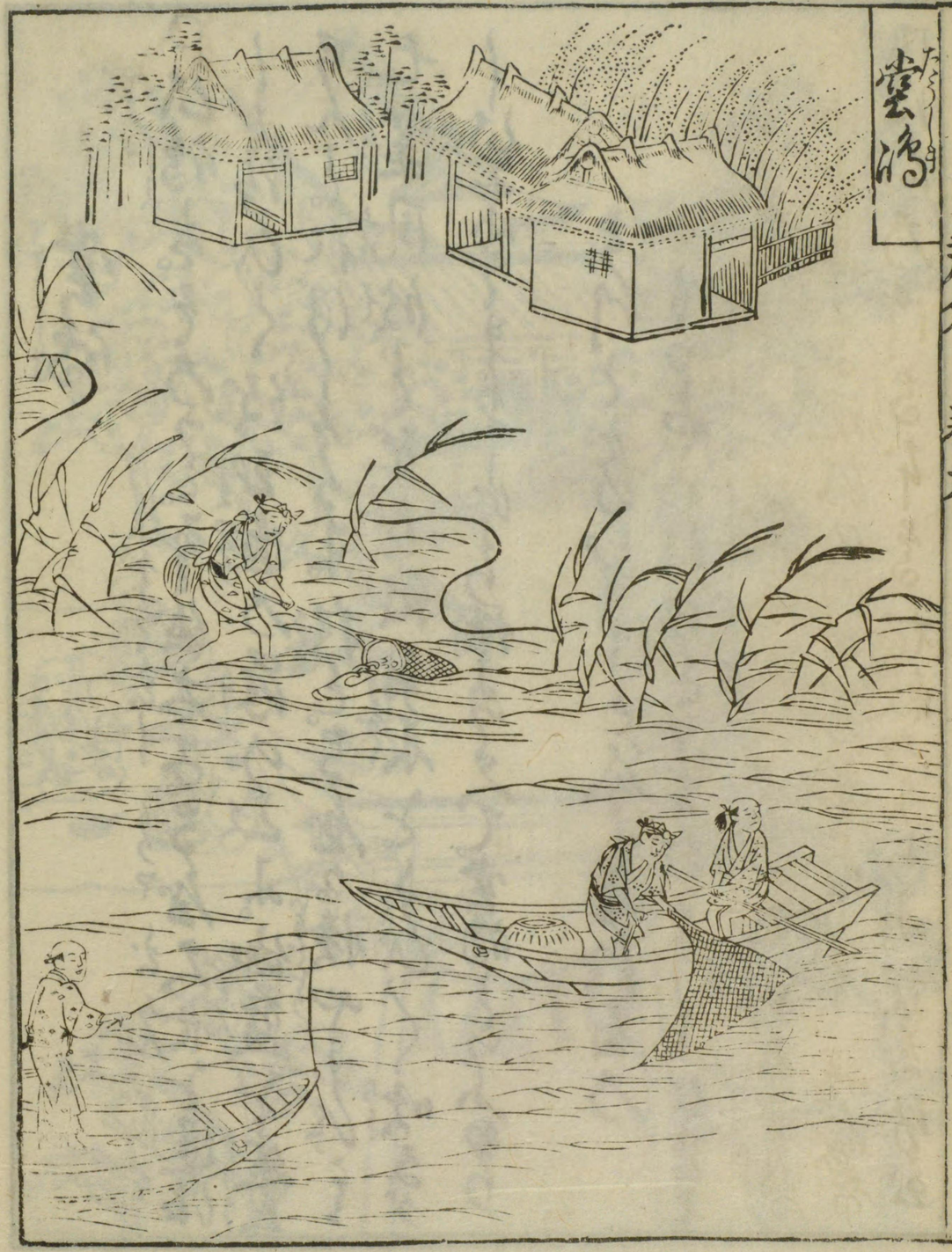

曽根崎

雲鴻

○此鴻は。そのうち。聖徳太子。ちゑ屋大臣を退治し給ひて後。玉造の岸の上に。伽藍を建立せんと。れぼしかるに。杉を。ちゑ屋が。憤やまひ。そも。霊風波となり。彼男木を。こびく吹なが。此あふてまわしにより俗よつてこれ雲鴻といふなり

とりとそのむしを今しぬれ面乃
もるやい法のさまたけそうし

校大僧都日与


雲鴻

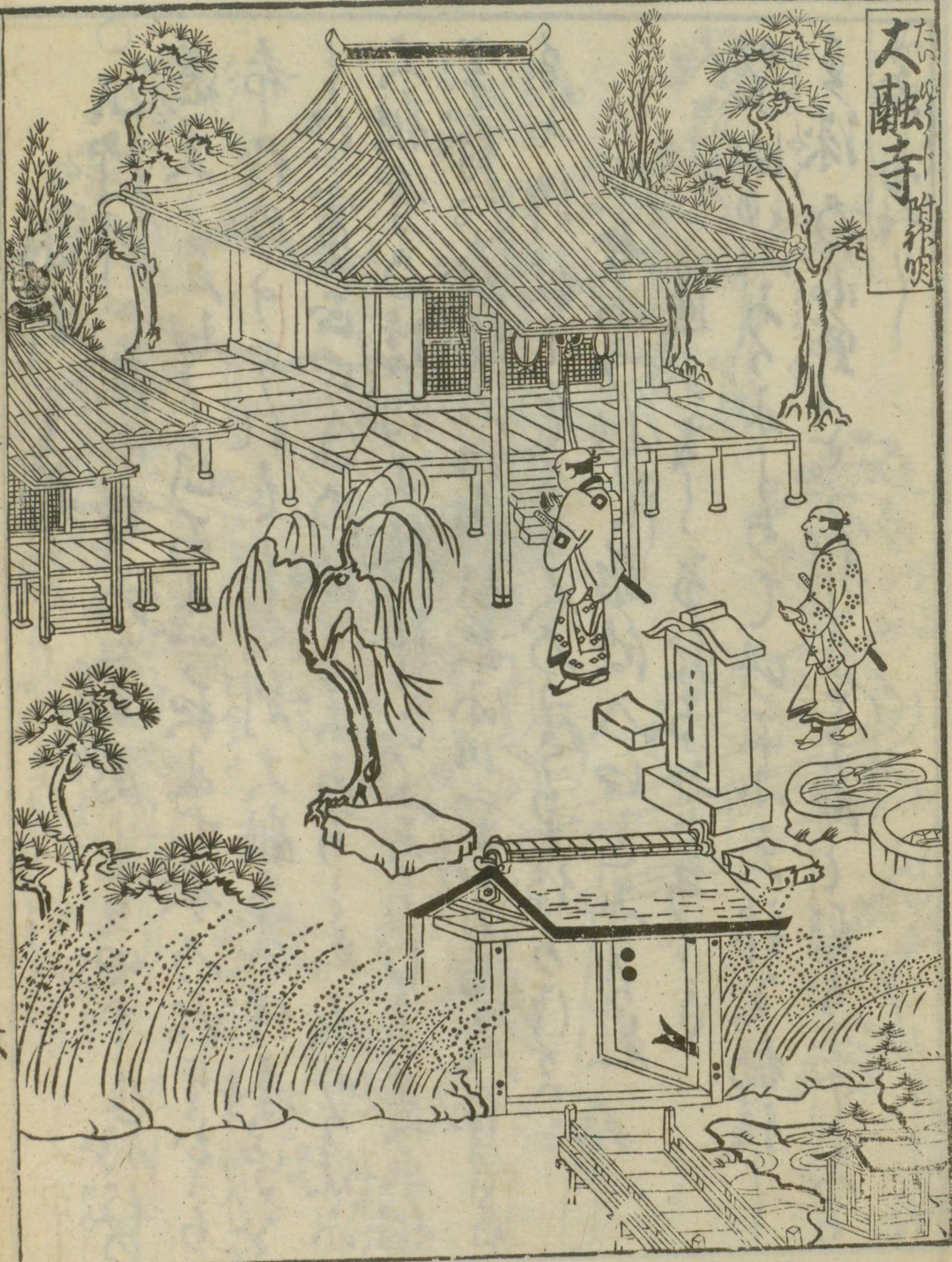
大融寺　并神明

○住木山大融寺は。諸職帝弘仁（辛）廿師奉ありし。勅願所也。御本尊は釋迦。某師。手平觀音の三尊也。則弘法大師を請し。開眼供養をなし給ふとし。并天照太神（光は此寺より。西東二町余。今の神明光之）弁才天女乃。二社を勧請しまふ。光又人法繁昌の法寺とし給ふ所也。其後源左大臣融公。志願を激し兼和乙丑山鐘經七堂を。建立しまふ。故。融公乃御諱を以。寺号と。命し。大融寺と称し給ふとも。又後鳥羽上皇。當寺へ兼元（丁卯）鳳輦をめらしし給ふと。緣起に見えたり。靈寶あまたお家中に世尊説法の時の袈裟あり。并諸家帝御宣命乃御寺本尊。桓穀のうちに。觀音。勢至

大融ち御幸

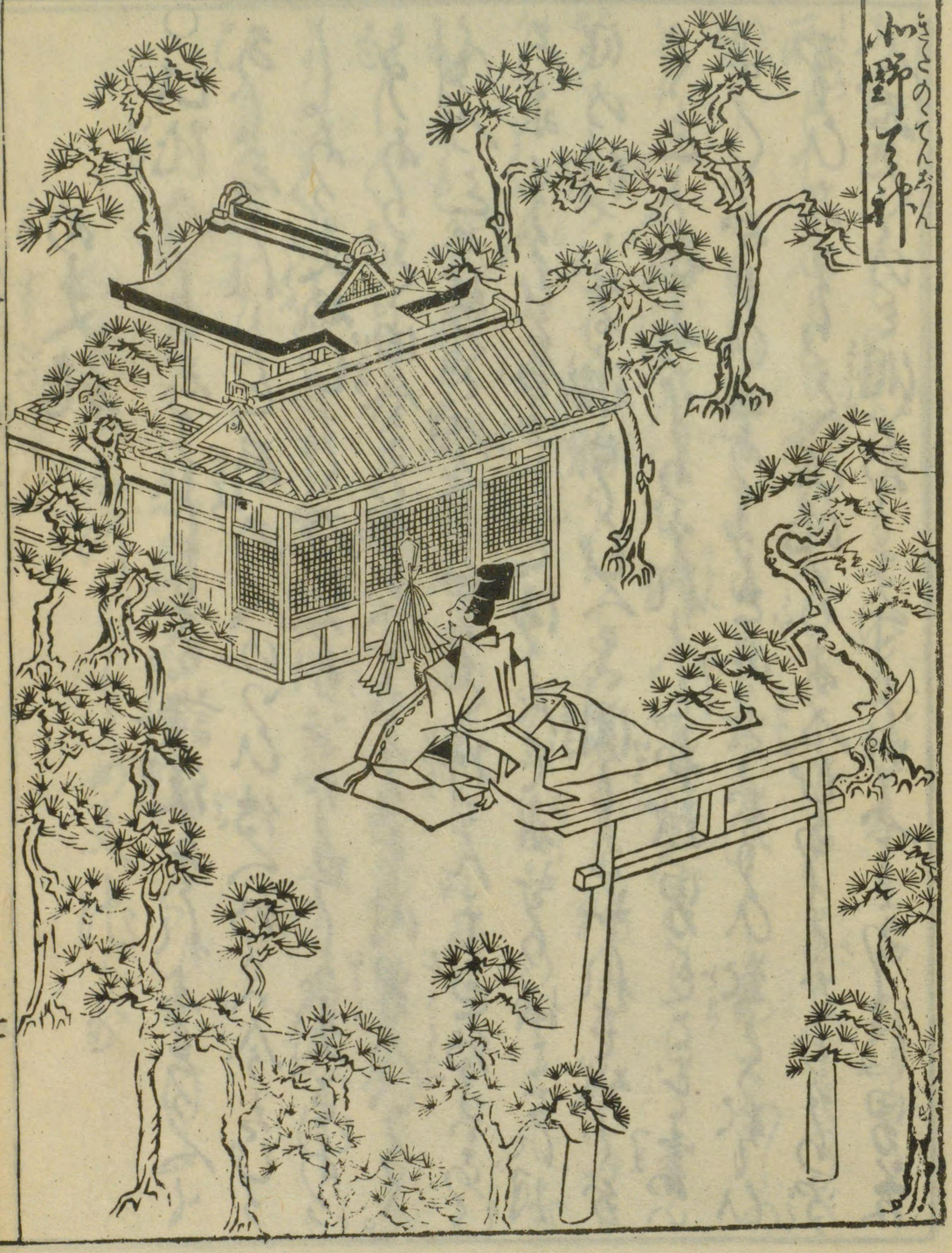
みぬ沢の三葛則弘法大師の御作也とうや。又中
将姫種子を御ぐしの髪まで。縫かふ。日天王縁一
幅。三ヶ所数種の珍黒珍寛ありといへども。てとあ
くれみ。いと図あらず

一西寺の観音は。大坂三十三所の第一番の
札所なりまた此あたりを。妹の尾といふ。是を
源義経と。梶原京時と。逆櫓の論をなせし
時。こゝ櫓の末を伐とりしところなるゆへにかく
いふとあり


大融寺 附祈明

小野天神

○此御神は。京小野乃聖廟より。四十里餘ほの
造笑とも。むしは不に。一夜に。七本乃松生おこら
希代のしるなれもとゝく。別大融ちの俺養守を
とけ。寛正四年乃。倫旨ありと也。又ある説に
大融寺乃境内に。梅塚といふあり。むし夏所相
宰尉へ。左近乃御時。此不に御一首ありて。詠しさせ
ます。御歌とて。さる人乃かゝる事侍りけるに
世につれなく那波入江もにこる也
道あまたなれ志しき
世にはゆへありなりて。此不に。天神を。勅請し
王孫乃小野を。うけしこと名と聞りとし。いつゝ
しづめべし



めぬ史沈

○此沈乃ことゝ。志りとしたる。證説それ志まる人も
なし。志かれとも。所乃人のいひ傳へ傳るハ。今ハむる
し。ある史姫むかく乃聚りを。なせしか。史さあり
るすありて。田舎ゆゑ人をしらへ。其時男乃いたく。
ゆゑ乃三ヶ月を待べしやがて帰らん。其色待ハあて
ろ水まうを色しと。海うんでハをり。海ことに月
日の行るす。雖ともむ人を関しなれば。ほどなく
くゝことせ水。なかれとも。お越男もこゝぞ書い
よく。おもひ水あくがき所にくおもひ起くおもひ
おもひあまりて。此沈乃ハ。入むなしくなりなり雪
人夢をのゝ洞をおとさすといふことなし。後男爰

あもしらもと家かすゝうに立越来ませむ。
所とも見えて。地かつわ。とさまじく菓乃ゝうく
生しかり。あまきてて。まうおもひし書もなし。お
ちり乃人ハ。同かれば。絆乃ことなんとうりしまく
ぎくよりも。ちや胸うちさハ義をて絆になみだせき
うひて。終に此池頭にきたり足どりとして。な
をとも。甲斐なし。今ハあるへきにあらすとくむ
なしくなりかうと也。いとあハまなしをやさうに
よりて。今の世までも俗につゝへくめ史沈とい
ひかうとなり

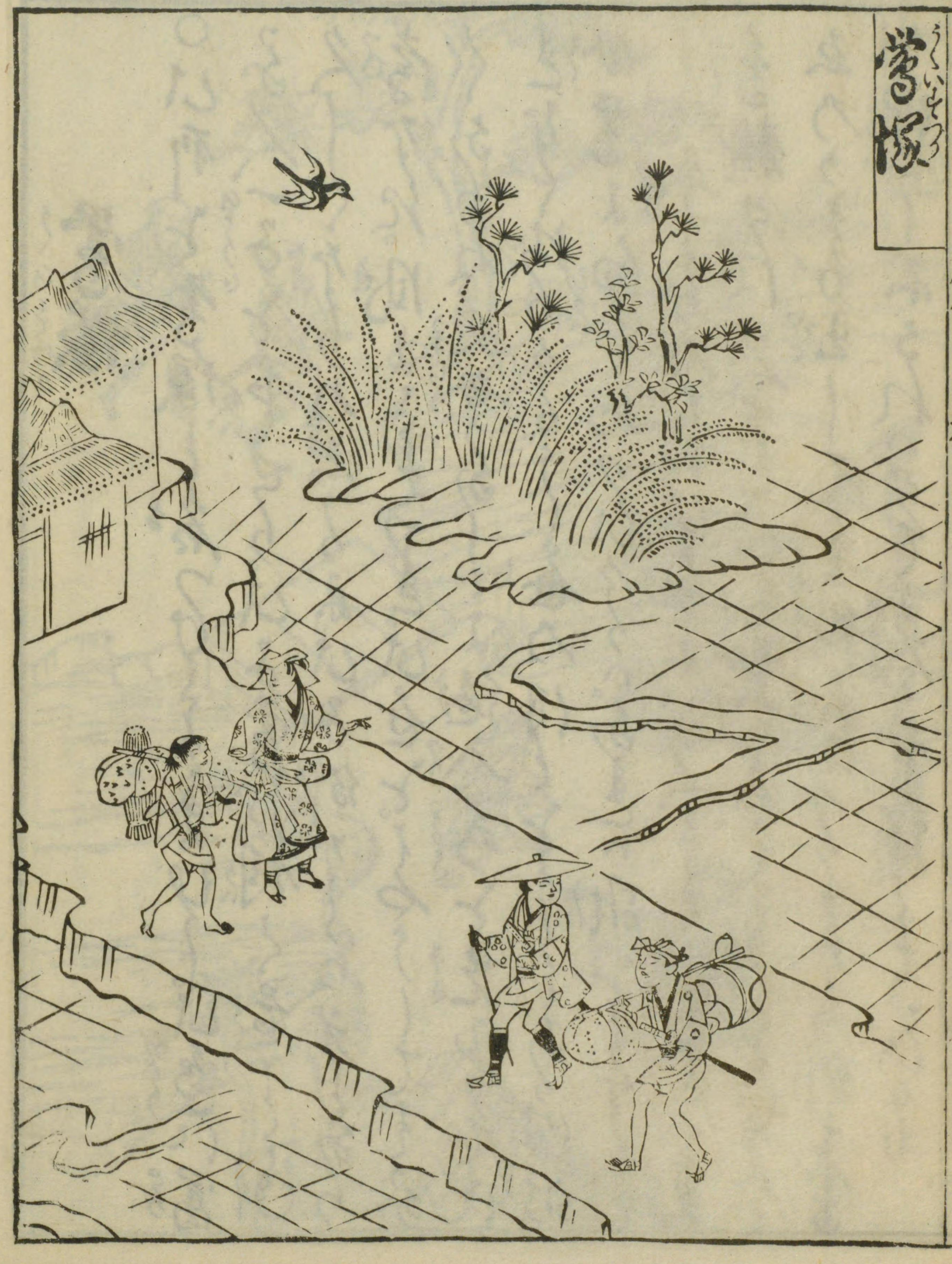
あもしら恋契乃を清ハくひそけに
おもひ志れしめ史沈かな

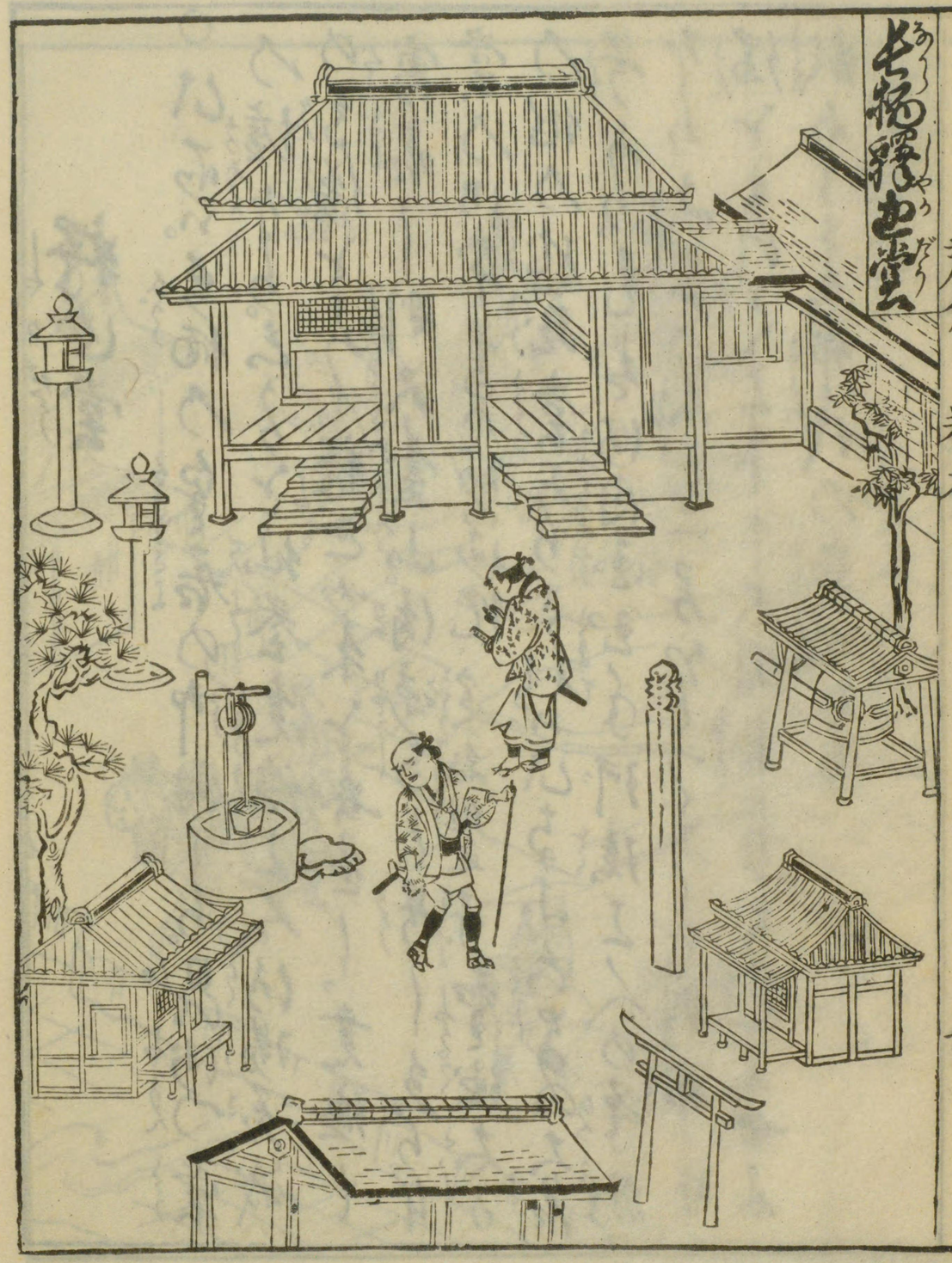
鶯塚

○此所を。鶯塚と名つけたるゝ。むかし。此鳥に富
家人一子を悲せり。此子鶯我飼ひ置ことを
久しくなりぬ。志かるに。此子例ならぬ身となり
壹なれ。風にさそはれ。此世をさらして。そらに
くなりぬ。父母かなしミに絶入。あるを先にそ。
しなく歸りたるゝ。うき世乃ほどをうらミ。ある時。彼
母鶯に向ひ物いひたるゝ。なれは雛をうすうと
し。今よりのちは。此家にいる人さそとあれは。実
鳥類とはいへども。此言葉をやぞしつゝにたんこ
ゑのかきり出して。言終死にたるとなり。則其鶯
を埋ミし所なれはとて。今鶯塚とそいひたり

釈迦堂（しやかだう）

○此所ハ。長柄の皇居（くわうきよ）の御時より。毘沙門堂（びしやもんだう）の墟（きよ）たり。然るを仙誉（せんよ）重源（ちやうげん）上人。夕陽ヶ岡（せきやうがをか）の尊像（そんざう）をうつし。釈迦如来を安置（あんぢ）し。重源も寓居（ぐうきよ）し則（すなはち）天臺山（てんだいさん）。清涼寺（せいりやう）と号（がう）し奉る。釈迦ハ定朝（ちやうてう）の作（さく）也。并（ならびに）聖徳太子（しやうとくたいし）堂の外なるハ。阿弥陀の脇の北に地蔵堂（ぢざう）あり。されハ此寺の太后堂（たいこう）あり。是を河内国（かうちのくに）玉手（たまて）珂瑶（とく）上人の筆跡（ひつせき）なれバ文字の太さ二尺ばかりにて則柿（かき）の額（がく）とよめり。上下十丈間余有（あまり）て。寔（まこと）に世にも珍（ちん）らしき。希代（きたい）の宝物（ほうもつ）なり



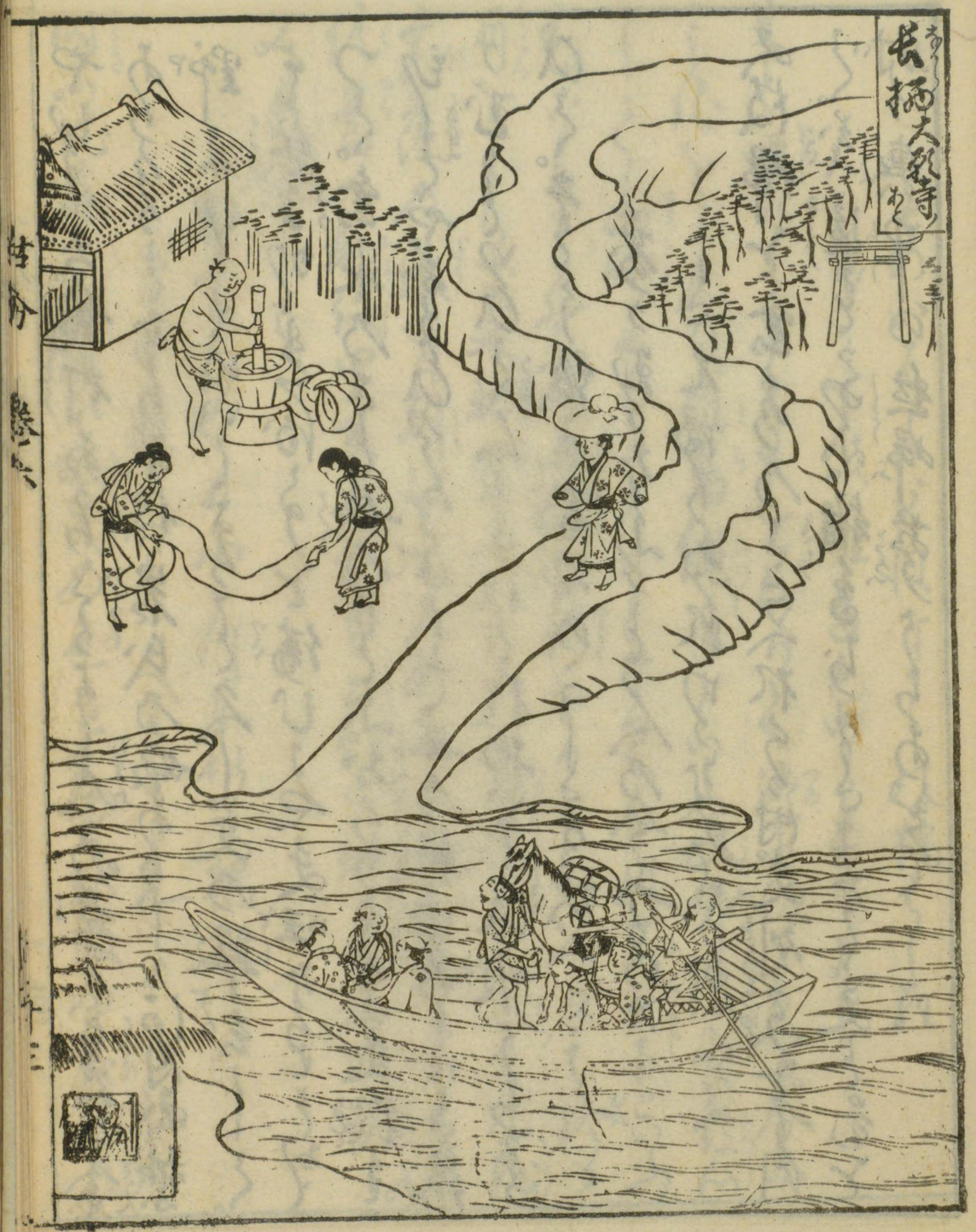


崇禪寺

○當寺乃御本尊者。十一面觀音。聖徳太子作なり。冥基德叟和尚也。大檀主ハ細川たゞ氏持賢云。普廣院殿乃。御菩提乃御為ニ。建立ありしと也。ことに遺紀とて。ことに云方義政云の御神判と。不持し来ありし。寶物あまたありといへども。涅槃儀一幅ヲヲヲヤウめんの筆 又此寺乃うしろの。雲林乃うちに稲荷大明神乃ことせありしまと也。此所をしく。想社乃濱ともいへり

大乳寺

○孤雲山大乳寺は。椎古天皇乃御宇。賜勅の練若にして。此本爲世量尊佛也（則岩氏平生の拙著乃古佛也）むかし拾津國那波乃罷と。同国雲水乃里。棹橋の支と。其際二里南海乃入江にして。数十乃鳴あり。縣橋処に。数国往是乃通路なりといへども海浪罷をうつら。法波にふさうのがりく鳴橋頽落とうこと。幾度なり。故に那波乃名あるともいへり今此大坂那波橋。其語一なりとかや。法人通路の絶えうすをうましふ。蜀羹。あるひは云。人柱を入て藥補あるは鳴橋如能せんと。天まことに。人をしく。いたしむかしや。法人の悲傷既に上中に及しかは。則法皮に沼ありて。通路おぬんるを。議せしめすふ。



結皮綫寛ありて。窯水乃亀に。いくりて。罠ともと。
人柱の任ける人を移せ。移すり所をもつす。也孫あり
とや。窯あれさしに。岩氏といふ人あり。関を鉞家付。
たりふ事こく云。穫のまちに。にぎのあらんと。人柱とせし
鳴橋如鞍せんといへり。皮花を見るに。岩氏乃若さ
家。穫つぎあり。則捕名して以て。人柱となすに。
鳴絲とのぼる稼穡者鏡乃地となまり。今乃中
鳴といふ花也。勅宣ありて。人柱乃入ける亀に。練
義を建立ありて。岩氏乃冥福といのらしめ給ふ。
今乃大乳寺花也。又欲しき。橋下ちとしよめる
現云 長柄なる橋もと寺をにくはなり
おこさぬ家をゆにあらんへん
又此亀に関あり則岩氏人柱に入ける此なりとう

やむしき龍灯あかりさるよし。今乃在りしも見る人も
ありけるとなりぬ。されば岩氏乃娘ありしが。この内出。禁
野にゆく。ものいとぎらこと久し。又乃單云しく。
き愁にかくまゐるすを傷むりや。史唖なるとおし
つく。蚕水乃さと。母乃もとにおくりけるが。史粗は
むしくや。おもひけん。まして。女乃親に。あそこき驚
かむとしひとく。ふこうれど粗いとは。唯うちまう
ひとく。そこう紙に。書付のこしたる頭

家かむりなにかと人乃さふものは
きえ帰りぬれ。ひかなみさかな

又枝婦を蚕あ乃さきへれくる時。史刈弓をもつ
く。義道をあふに。雉鳥ちまたになく。史と兄を
射り輿中の枝婦夢うちあぎて

ものいはし父はなりしれ橋もし雅
なかすは雉鳥をいしきさくまし

史と唖なしざるすを。志りく。後に。ひきうへる。今に
ことをとよんで。雉鳥縄をもとゆふ。巳婦後に發ん
しく。山磯にとゝけるとなると。今れ不云ることいふ。
兄なりしを。又小岡に行きるとゝいへり。ことを終る
所をしらず。又物宣によりく。古橋木をれて地蔵
菩薩乃像を。刻むく。大和ゐに安置せしめおふ。
伏嵩の物伏田原大納言公經口佛菓に胡跪し。
又自詠して

なかしにやりにうけもれし橋柱
まさ道うへく人もことを見

時に地蔵菩薩に微笑乃色を兄を難波乃笑地蔵

ともいへり

三寶寺

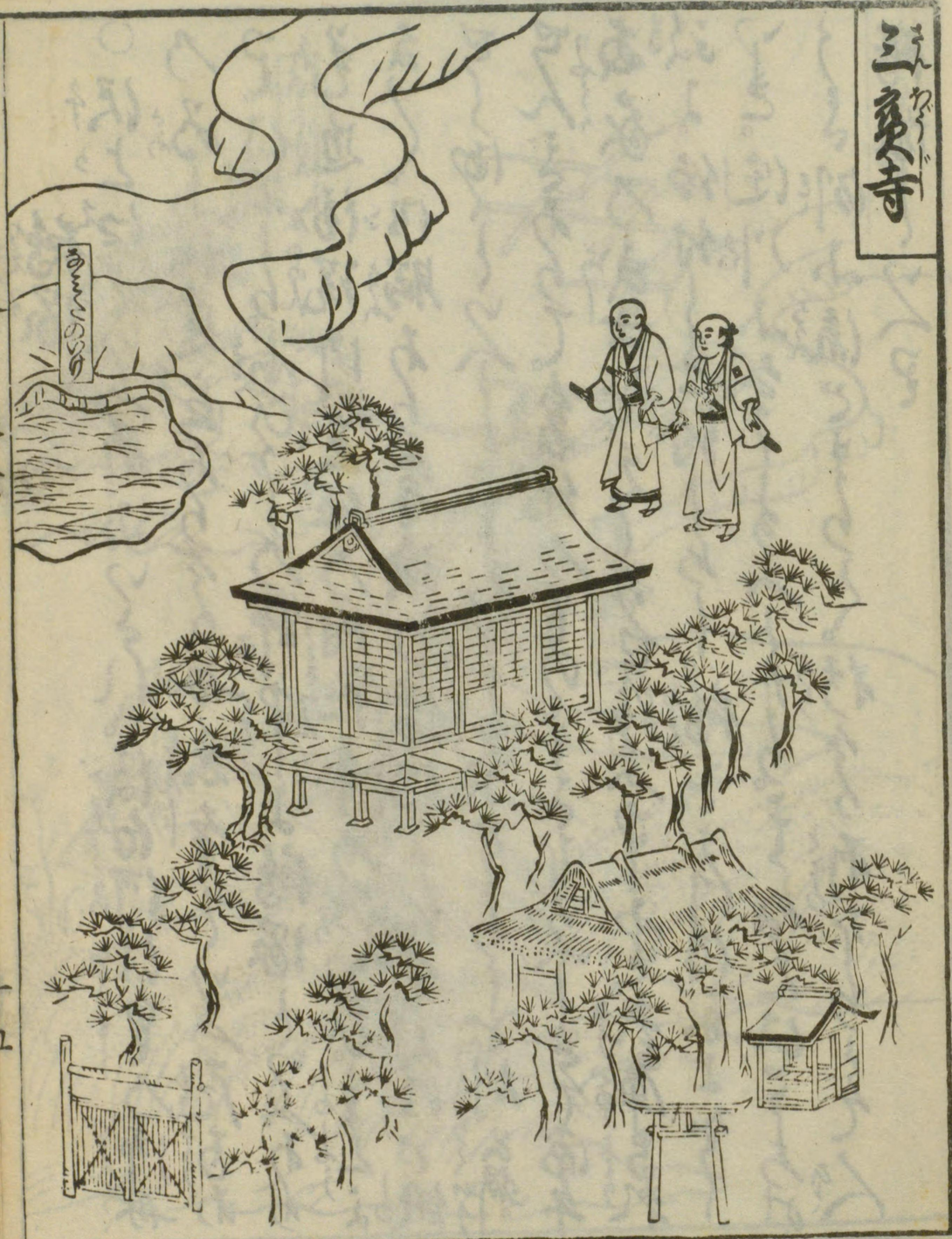
○當寺は。大日といへる。沙門のまゝし所也。しかるに。此大日とませしは惡七兵衛京清が伯父なりしか。いかなりしありやうやらん。京清此大日を殺せしとあり。それよりして。惡乃事と。世にいひそへなりとなり。然じて。京清は。かぎらず。義平が。伯父乃義賢と。うけにより。惡源太と。よいまきるも見ぬのなりに歎をうう。また侍に。京清がなきごろ此かとといふ所もあり高濱といふも此邊なり

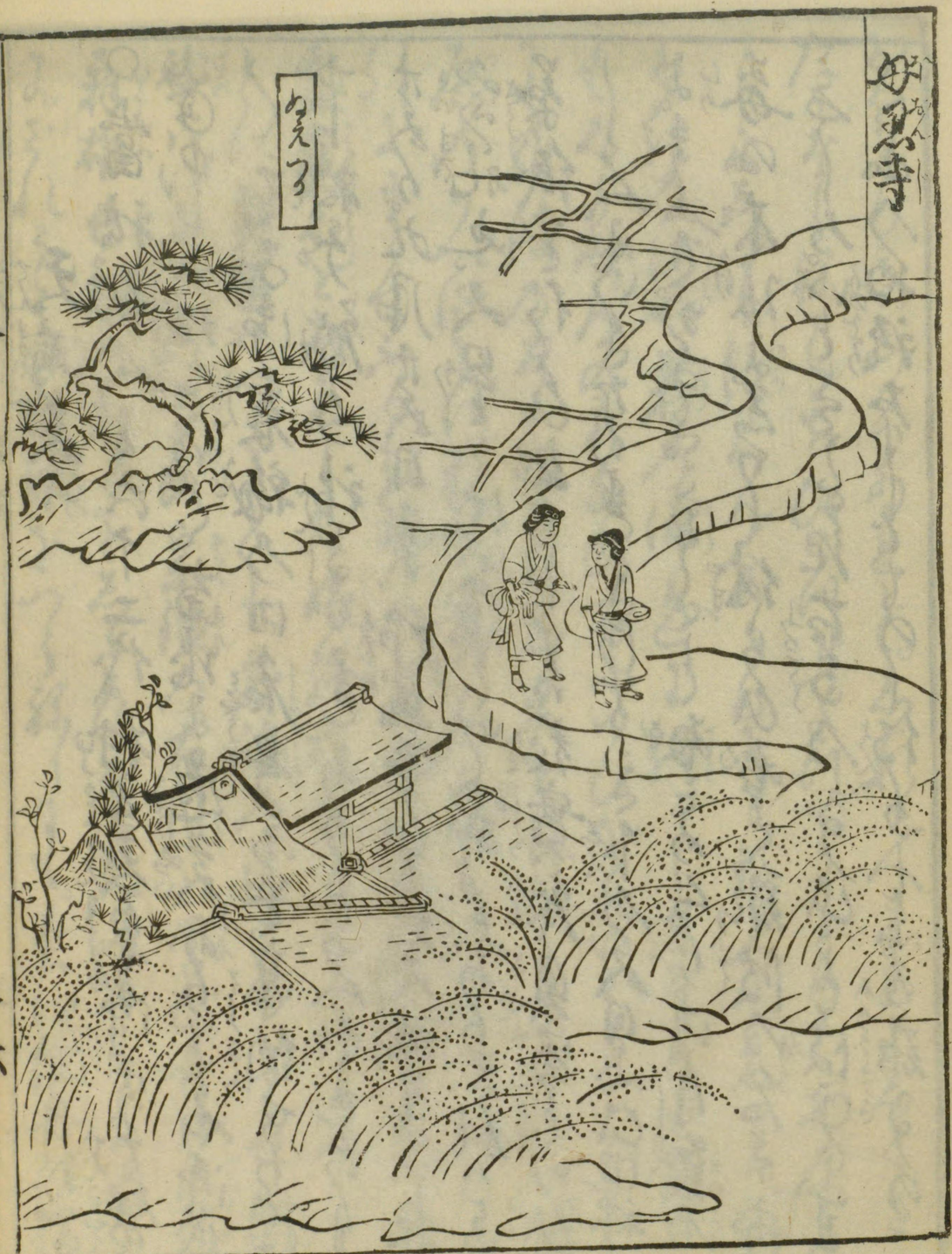
後拾賀

さくこれは千代も經ぬへし高濱乃

書にもしまつり鶴のも故

大上天皇





鵜塚

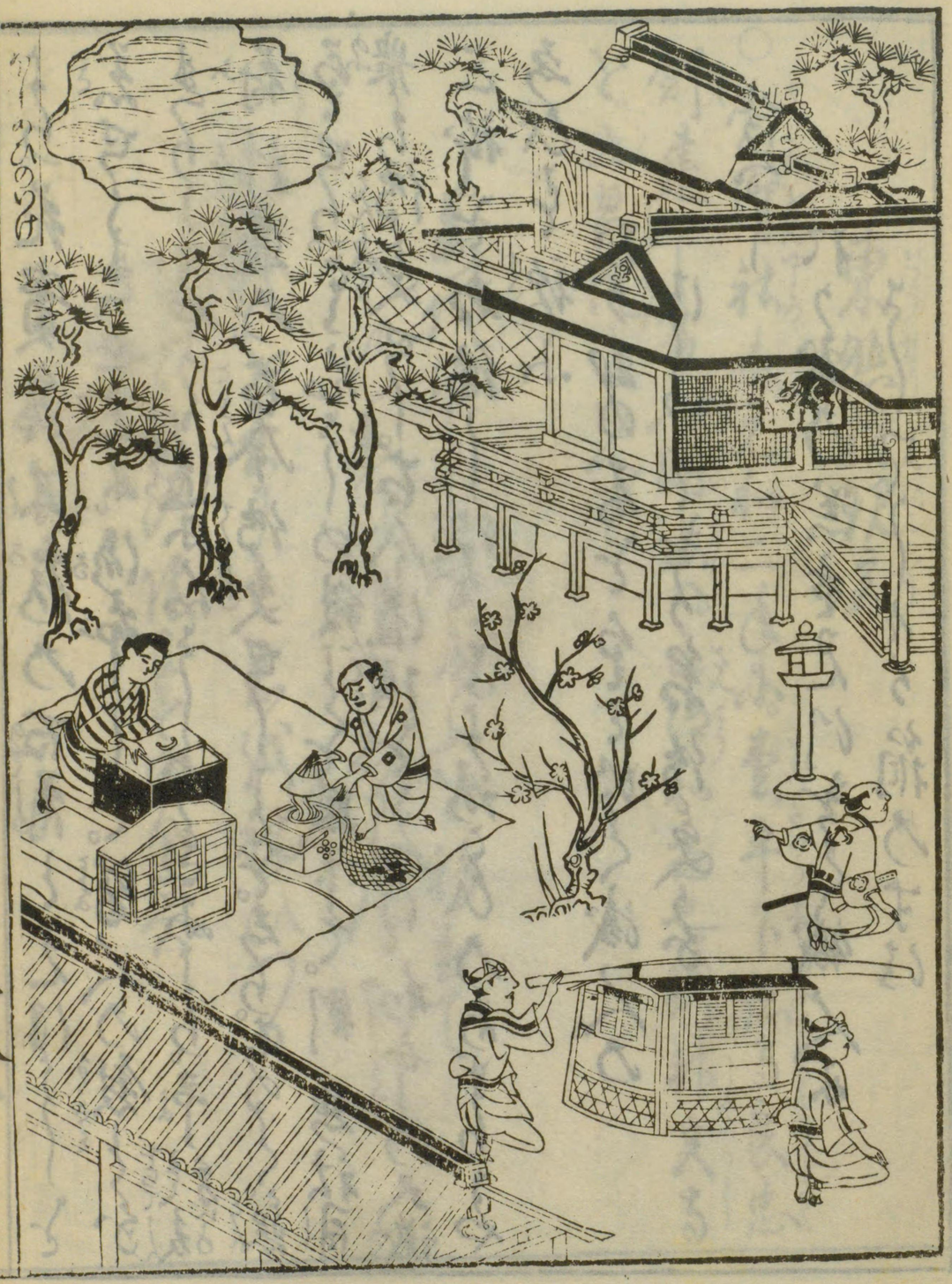
○沢上江といふ所に。いたれば。後白河法皇乃御母乃為に。此建立ありける。母恵寺といふ尼寺あり。此所より。小ひらし乃野中に鵜塚といふあり。是近陽院御在位乃時仁平乃法ひ。主上よりく。此脳あり。有験乃僧侶に給て。大法を修せらるといへども。其しるしなかりしを。別公卿せんぎありて。変化乃ものゝ。まさなるべしとて。滝平夏家乃武士を。えらひ出給ふ中に。兵庫寺執政に。給付し是討とめし。鵜をうけ給ふにをしいまし。淀川に。なりしをふしとなり。ことぬえ此ところ此うき例に流とまりく。拷ゆる所なりとて人鵜塚といへり

天満宮

○当社は人皇六十二代。村上天皇御宇。天暦年中に詔をもつて。当地に造営ありとかや。御代々天子御宸翰の御名号など。奉納せり。年中数ケ度の神事これありといへども。六月廿五日なり。九月廿五日には。神馬をひき出す。大形なる祭礼也。又星の池をとしいふ所をあらはされしは。菓紙をたれひ出しぬるは。花實庵貞室といひし人ぬいさなりき。きけしこさ下の又見に此所よ。まふでかうさごとなさと報ゑめくり。此自筆の梅の木陰に。やすらひ居て。難波の名所とこゝろ。いとさえ古なるの名跡とて山まこゝ山の地理たしどもの待りし。ふの雛るかの

かやうりき。またはおもど。あはれかゝる人ままよふくさたりなりし跡も。ひそれとりとめなく。地のしみぬりし。後見人の心あるて。これより

る。紀乃海や若乃浦をば住ふし方なまゝも。露もてかねるのあらひ。おふりひとく。いまゝはを。難波のよしのきちへ志はもつりよのの實の人問された。花咲實家の香よ入。筆乃海のしままもせふりし紀都の霊佛霊社と報ゑめぐる霊實おとあしゃんして始終六十とかし待わねまこしれ貞室は。やさしくし。歌鴻の道よ心とよせ滑稽にいふにへの。弓武宗鑑の古風を学び。奇れは貞徳翁稚ものかくとさしひく。寛文のおそらめのかつよ。おれうこの百詠とつゝ跡しまし。重に維舟


ひのりけ

天満文附星合花

より。花實唐木霧乃百首と。えほうしを
惹せしまた。世上に。流布して。皆人乃慰とな
まりとうやうく道にんさしふかさにより。予能
苻神道乃古今傳受せしことを。しり。しのるく。熟
量せり。こゝんさしのまことを。感じて。則 想社司
農ち傳受せし。古今灌頂をさづけ。和所乃又識
三神と。お傳し傳る。こゝよ語こひ乃あまりまや
及びを歌に

おうまの木を皇と切く識人乃
けしいてをり和傳受ゝ

くし

れうま乃黒童見川をく識人に
さしけうしくり箱乃寸法

東照檀現交

○當御社は。元和二年に。雲平下総当良忠
剣建しなふ。開山は。三江和尚也。則神交当
と。九昌院といへり

萬代のもしめとくふを祈重て
今行末は神うしるしん
万代を雲まて無紙祝ひつる
ちとも勢の陰まを両んと思へ

難波名不記者一無新若治之述作也
治者是紀陽藤原氏之家に産して初者
紀伊國君にまつらんしか不幸にして南山
にさすらへ辛苦なすら学ぶこれに積雪勢衛
に眼をさらし遊北京養壽院道作法印之
設門下無有者之得て其名嗚呼山事
久し然に或見高野大明神より篤神詠
感の神矣通篤集と云題号を勅し
給ひしとなり其功を賞給へ編集して十冊
とまとめ世に傳ひ給ひ書是也集成し時

仁和寺勉法勢宮　上論ありて御感悦
之餘治　御前にめされいとを望さし御
ことなきこまかりの撰集の志ふ御ら
為恩召なるとの事出なる事ふ御ふ御則
御室宮執奏によりて治ふつゝら稱墨を
深かけまくを辱も　天子、事を重く又
法皇女御所にもさしけさせ給ふとも
是謀其人なしして知へしと又此書ち
治　難波之旅館之賜屬久に舊治本
を書集て号蓋分船其奥ゝり

一首之詠ゝ前を出流て而ゝ方に来せり
巻ゝぬるをうしまゝ人を語とをに
せよ誠ゝ方にしあらず称を
而見ゝ宮成ち難波津之久せり此
地といへとも然に不見伴之書治追と云
物に粗陸半載ゝ御ふ是信用潜是なる
讃を是なる箱にして悪事難数日紙を
書堂　何家司　偽聞て而元陸辞之頻
重ゝ故與与ゝ所鎌梓也もとより
治と而者遥雖隔東文同其ゝ謀所

貴古賢於於嘆德之餘深者筆後
ノ加者也

于時延寶三乙卯夷則既望日

洛葉東山桑門磐溪

右蘆分舩者搆州難波地景
古今名所記也予潛求之聊為
童蒙繪其所〻令板行者也

延寶三季
陽月吉辰
書林
山本氏理兵衛開板

「古版地誌刊行會」初會の配布たる「難波名所蘆分船」の復刊本茲に完成す、原本の「蘆分船」は延寶三年の出版なり、如何に文化の幼稚なりし時代と雖も當時の發行部數は少くも二三百部を下らざりしならん、然かも二百五十年の今日、其殘存せるもれ僅ふ數部に過ぎず、思ふに數十年の後には或は其の總てが散逸し去るに至らん、玆に幸ひ予の素志が貫徹し、大正の復刊本として世に傳ふることゝなりぬ、最に延寶板の「蘆分船」が二百五十年の生命を保持せし前例によらば、予がこの復刊本も庶幾くば同じ歳月の壽を保ち得んか、若し夫れ二百五十年後に於て予と志を同うする好事の士ありて予が大正の復刊本を更に復刊せることあらば、この「蘆分船」は更に又二百五十年の生命を持續し得ん、予は此事の實現を二百五十年後に期待するものなり、聊か記して大方に訴ふること爾り。

大正甲子晩春　　だるまや主人　木村助次郎　識

大正十三年四月十日印刷
大正十三年四月十五日發行

古版地誌刊行會

編輯印刷兼發行者　木村助次郎　大阪市南區南炭屋町廿番地

發行所　第三回配本　芦分船五六

大阪市南區八幡筋卅木綿橋東入
だるまや
電話南四九四九番
振替大阪貳一七〇番

162
2
86